

京都東ライオンズクラブ会長賞

## 相手の気持ちを考えて

京都市立市原野小学校五年 佐藤 杏

わたしは、事件や事故に関わったりしたことは今まで一度もない。そのことに、気づいた時、わたしは幸せで、恵まれていると思った。でも最近、テレビをつけると、毎日のように事件のニュースを目にする。毎日胸がいたくなる。どうしてそんなことができるのだろう、この人は何を考えて行動しているのだろうと、いやな思いをする。そして、いつもこわさを感じたり、つらくなったりする。ある日ニュースを見てみると、つみをおかした人が、

「中二の時にいじめられていた。」

と話していた。それを見たお母さんが、

「世の中で起きていることを、自分には関係のないことと考えてはいけな  
いね。」

と話していた。その言葉を聞いて、わたしは今、世の中で起きていることに一度目を向けてみるのが大切だと思った。そしてわたしは、今まで考えたことのなかった、つみをおかした人の思いや、事情について考えてみることにした。

新聞を読んだり、ニュース番組を見たりしていると、つみをおかした人は、家族や友達、仕事の人などと、人間関係がうまくいかず、こどくを感じたり、いじめを受けたり、仕事やお金がなく、生活がたいくつだったり社会の中で思うように生きていけない人が、ほとんどだと知った。そのような人が、社会に復帰した時に、その人たちを受け入れる社会が前と同じだったら、その人は、どうなるのだろう。前に犯した罪だとしても、周りの人から差別を受けたり、冷たい目で見られたりすることは、わたしはちがうと思う。なぜなら、そんな社会なら、またその人がこどくを感じ、同じ気持ちになっ

てしまい、再びつみをおかしてしまうかもしれないからだ。

ある日、朝食を食べていると、ある一枚のチラシが気になった。そのチラシは、「非行と向き合う」という題名だった。そのチラシには、つみをおかしてしまった人の経験や、その家族の気持ち、そんな人を助けようとするグループのことについて書いてあった。つみをおかしてしまった人の経験のなかで、ありもしないうさを流され、頼りにしていた親友にはうら切られ、どんどんひとりぼっちになった人がいた。そして彼女は、何もかも信じられなくなり、深い闇に突き落とされてしまったそうだった。そしてその時、彼女は自分を見失い、少しずつ心のとびらをとざしていった。でもある時、一人のクラスメイトが、ひとりぼっちの彼女に寄りそってくれたそうだった。悲しい時には笑顔にしてくれたら、悩みを聞いてくれたりしたことで、彼女の闇は消えていったそうだった。

社会には、その人と同じ経験や思いをして闇をつくり、心のとびらを閉ざしてしまってしまった人が、きつとたくさんいると思う。そしてその人は、だれでもいいから、一人でもそっと手をさしのべてほしかったのだと考えている。そんな時に、声をかけてあげられる人がいれば、心のとびらは少しずつ開き、光へと変わっていく。そして、みんなが人の気持ちを考えれば、非行はきつとなくなる。だから一度、相手の立場にたって、考えてみてはどうだろうか。